「寛政の上覧相撲」(1791年)の開催経緯について：
19代目吉田善左衛門の登用をめぐる

木 梨 雅 子¹⁾

**Historical study on the arrangements for the
'Joran-sumo match in the Kansei era':
with negotiations concerning the appointment of
Zenzaemon Yoshida XIX to the top of sumo party concerned**

Masako Kinashi¹

Abstract

The purpose of this study is to investigate the negotiations between the Tokugawa shogunate and the 'Sumo-kaisho' (an organization of sumo wrestlers and referees) regarding the arrangements for the 'Joran-sumo match in the Kansei era', which was held in the presence of the Shogun in 1791, and to clarify the principles underlying the arguments for and against the appointment of Zenzaemon Yoshida XIX to the top of the sumo party concerned. The archives used for this study were selected from the National Diet Library, and were written down by the Tokugawa shogunate for the record. The 'Joran-sumo match in the Kansei era' was the first one held in the Edo period, so the Tokugawa shogunate was unsure how to hold this momentous event. Therefore he appointed the Sumo-kaisho to arrange the Joran-sumo match for him. The Sumo-kaisho had been organized under Zenzaemon Yoshida XIX, who had asserted that he had been the chief of the sumo party for generations all throughout Japan, and that the Sumo-kaisho had been his apprentice. Therefore, the Sumo-kaisho required that the Tokugawa shogunate appoint Zenzaemon Yoshida XIX to do the 'sumo-shiki' (a sumo ceremony) for the Joran-sumo match since both the Sumo-kaisho and the Tokugawa shogunate recognized that the 'sumo-shiki' was essential for the Joran-sumo match. However the Tokugawa shogunate refused, and instead appointed Shonosuke Kimura VII, deciding that Zenzaemon Yoshida XIX was the chief only in name. Accordingly Shonosuke Kimura VII was made the head organizer of the Sumo-kaisho based on the fact that Shonosuke Kimura VII had had several experiences as substantial organizer, whereas Zenzaemon Yoshida XIX had no practical experience. Furthermore, his background was very suspicious. However, the Sumo-kaisho had been united behind Zenzaemon Yoshida XIX and his background, so if they allowed his background to be questioned, it would show a lack of unity to the Sumo-kaisho's part. Therefore, the Sumo-kaisho insisted on appointing Zenzaemon Yoshida XIX to do the 'sumo-shiki'. In the end, the Tokugawa shogunate appointed Zenzaemon Yoshida XIX to do the 'sumo-shiki' and his questionable background was overlooked. As a result, the 'Joran-sumo match in the Kansei era' proved to be an important factor in the Sumo-kaisho's effort to gain authority as the leading organization in sumo.

Key words: the 'Joran-sumo match in the Kansei era', the 'Sumo-kaisho', Zenzaemon Yoshida, Shonosuke Kimura, the 'sumo-shiki'

(Japan J. Phys. Educ. 43: 234-244, November, 1998)

1) 奈良女子大学大学院人間文化研究科
〒630-8506 奈良県奈良市北魚屋西町

1. Graduate School of Human Culture (Doctoral Degree Program),
Nara Women's University, Kitaoyanishi-machi, Nara, Nara 630-
8506

キーワード：「寛政の上覧相撲」、相撲会所、吉田善左衛門、木村庄之助、相撲式

本研究の目的および方法

寛政3(1791)年6月11日の江戸城吹上御庭において、相撲史上に名高い「寛政の上覧相撲」(以後「上覧相撲」と表記)が行われた。これは開幕以来、初めて將軍の面前で行われた相撲だった。本研究は、「上覧相撲」を指揮した19代目吉田善左衛門が、幕府に登用されるにいたる論調に注目しつつ、この「上覧相撲」の開催経緯について明らかにする。

「上覧相撲」については、和歌森(和歌森¹⁹⁾ p. 31)をはじめ多くの論者が認めるように、当時の勧進相撲の隆盛を映した象徴的事例として、はやくから意義づけられてきた。例えば、常陸山¹⁾、横山²⁰⁾、古河²⁾、酒井(酒井¹⁴⁾ p. 172)、窪寺⁷⁾らの記述をみても、いずれも勧進相撲の興行団体である相撲会所が「上覧相撲」に参加していたことに着目しており、「上覧相撲」の開催を、天明年間以来の空前の人気にあった勧進相撲が叡聞に達し、將軍が引見に及んだものとみなしている。こうした論議にかかわっては、宮本と高埜、新田が提示した以下の指摘に着目すべきである。

まず、宮本は「上覧相撲」がもつ政治性、とりわけ朝廷を意識した政治性について述べた。すなわち彼によれば、「上覧相撲」とは、幕府が当時安定していた政権を背景に、かつて天皇主催で行われていた相撲節会を「上覧相撲」という將軍主催の形で復活させることで、最高権力者が朝廷から幕府へと移行したことを誇示する場だった。そして、この「上覧相撲」実施を推進したのが熊本藩細川家であり、そこには家臣である19代目善左衛門からの具申があったとしている(宮本¹⁰⁾)。

また、高埜は「上覧相撲」の意義について、相撲が家職として成立した重要な催事だったと言及している。つまり「上覧相撲」企画当初、幕府は勧進相撲興行団体として主導的立場にあった相撲会所に指揮を命じた。だが、上覧という一大催事に相応するだけの定まった作法、すなわち規式をもたなかった相撲会所は、かねてから相撲の故実

を有する「相撲司」と称していた吉田家を頼った。そして当主19代目善左衛門が「上覧相撲」に登用されたことで、相撲は吉田家の家職として幕府に公認されたと指摘するのである(高埜¹⁷⁾)。

そして新田は、幕府の勧進相撲政策の視野から「上覧相撲」の意義を述べた。彼によると、幕府は、相撲渡世人に多かった無頼者を吉田家一相撲会所という体制を通じて一元的に統制させておくという治安維持上の有益性を見出していた。このため、善左衛門に登用することで吉田家に絶対的な権威を付与した「上覧相撲」を、幕府の勧進相撲政策における一つの集大成と位置づけているのである(新田¹¹⁾ pp. 258-261)。

上記のように、宮本、高埜、新田は、いずれも19代目善左衛門が「上覧相撲」における重要人物であったことを指摘している。しかしながら善左衛門が登用されるにいたった経緯については、三者ともに深く言及していない。たとえば「上覧相撲」前日の6月10日に善左衛門が突如登用されることになった経緯についても、宮本と高埜は何も触れておらず、新田の場合も、相撲故実に基づく儀式である相撲式を「上覧相撲」冒頭において実施しようと計画した際に、善左衛門の有する故実が急遽必要になったためではないか、と推察するにとどめている(新田¹¹⁾ pp. 213-214)。また、この他には、善左衛門が肥後熊本藩細川家の家臣だったことから、他の諸大名との関係を配慮し、寸前まで登用決定の公表を控えたのではないかという能見¹³⁾の推測が確認されるだけである。

したがって、「上覧相撲」についての論議を深めるためには、善左衛門登用の経緯を明らかにすることが必要となる。そこで本研究では、新田の推察に基づいて、善左衛門の有する相撲故実が幕府に必要とされるまでの時期と、それ以後の時期とに二分して開催経緯を把握することにした。具体的には次の時期区分を設けた。まず、第一の時期として、相撲会所が善左衛門の登用を要望したにもかかわらず、幕府がこれを却下した寛政3年5月20日から26日まで。すなわち、相撲会所と幕府の対立が表面化した時期。続いて、第二の時期として、善左衛門に登用しない方針で準備を

進めていた幕府が、善左衛門登用に傾いていった5月27日から6月10日まで、すなわち、吉田善左衛門の相撲故実が必要となり、登用にいたる時期である。

これら二つの時期の経緯を明らかにする史料としては、従来は、相撲会所文書（酒井¹⁴⁾）や、相撲会所行司の式守蝸牛が相撲道の秘事を伝承することを目的として著した『相撲隠雲解』の中の「上覧之一式」（式守¹⁵⁾ pp. 167-171）が用いられてきた。だが、いずれも相撲会所側が記した史料であるために、幕府内での善左衛門登用をめぐる経緯については、ほとんど知ることができていない。そこで本研究では、幕府内における開催経緯が記された「於吹上御庭相撲上覧二付取扱一件」⁹⁾（以後、「取扱一件」と表記）を使用する。これは「上覧相撲」を管轄した南町奉行所が、上覧前後の経緯を寛政3年5月20日から7月19日までにわたって記した官製史料である。幕府内での経緯に触れるこの「取扱一件」は、これまでどの研究にも使用されてきていない。

1. 幕府と相撲会所との対立発生期：5月20日から26日まで

(1) 善左衛門登用を要望する相撲会所に対する幕府の却下

「上覧相撲」開催に向けた具体的な準備は「取扱一件」によると5月20日に始まる。この日、南町奉行を務める池田長恵は上覧会場を吹上御庭と定め、御目付役に平賀式部少輔と中川勘三郎を任命した（「取扱一件」⁹⁾、5月20日）。「相撲会所文書」には、同日、南町奉行所への出頭を命ずる差紙が、会所年寄の鍛山喜平次に宛てて下されたとの記述がある（酒井¹⁴⁾ p. 172）。この時、会所は同年4月22日から興行中であり、鍛山はその勧進元を務める有力年寄であった。

翌21日に鍛山は補佐役である差添の伊勢ノ海村右衛門と共に南町奉行所に参上し、池田長恵から「上覧相撲」開催の内意を得た（「取扱一件」⁹⁾、5月21日）。そして続く22日には、それを明文化した全七ヶ条にわたる「心覚」を与えられた（「取

扱一件」⁹⁾、5月22日）。各条の趣意は、①現在、興行のために江戸に集まっている相撲取を解散しない事、②「上覧相撲」に出場させる相撲取を東西に組分けして報告する事、③相撲場の四隅に立てる四本柱、水引幕の配置についての説明書、ならびに土俵の築き方を説明した二枚の絵図面を差し出し、入用の物品についても見積書を提出する事、④相撲式の実施要領を報告する事、⑤「上覧相撲」用の贅沢なまわしを用意しない事、⑥「上覧相撲」開催を知らされた相撲関係者が権威に驕って、粗暴な行動にでないように統轄する事、⑦以上のことは、格別の場合を除いて、みだりに口外しない事、というものであった。

ここからは「上覧相撲」にむけた力士管理、会場設営といった実質的な部分を相撲会所が担っていたことがわかる。なかでも着目する必要があるのは相撲式について言及した④である。なぜなら相撲会所と幕府の対立は、以下に記すように、この相撲式問題をめぐって表面化するからである。

24日に鍛山は「心覚」で指示された通り、四本柱、水引幕、土俵の築き方についての説明書等、一連の書類を中川に提出した（「取扱一件」⁹⁾、5月24日）。だが、相撲式についての報告だけがその中に含まれていなかった。これを受けて、翌25日の相撲会所文書（酒井¹⁴⁾ p. 172）には、南町奉行所が早期の報告を会所に要請したことが記録されている。そして南町奉行所はさらに続けて、今回の「上覧相撲」は勧進相撲興行の作法に則って実施すると明言し、特に相撲式については寛政元（1789）年11月の「勧進相撲に取り行ふ通り仕るべき」と念を押して指示したとある。だが、この命を聞いた鍛山は即座に「故実式に就いては、細川越中守御家来吉田善左衛門と申す仁、相撲行司の家故、御尋ね遊ばされるべき」として19代目吉田善左衛門による相撲式の実施を願い上げた。すなわち、「上覧相撲」準備開始後まもなく、相撲会所が善左衛門の登用を幕府に要望していたこと、そして、それは相撲式の実施に関するものだったことがわかる。だが、これに対して南町奉行所は何の返答も行わず、鍛山の要望は取り上げられないままに終わった。

南町奉行所からの督促を受けた翌26日、鍛山と伊勢ノ海は奉行所に参上し、寛政元年の相撲式の実施要領を報告した(酒井¹⁴⁾ p. 172)。そして、寛政元年の勸進相撲の法式に固執する南町奉行所に対し、24日に提出した一連の説明書が元年と同様の法式であることも併せて言上した。奉行所はこの報告を聞いた後、正式に「上覧相撲」開催を鍛山に通知している(「取扱一件」⁹⁾、5月26日)。この時に示された開催予定日は6月5日であった。だが、鍛山らは吉田善左衛門による相撲式実現を断念したわけではなく、相撲式は「何卒、善左衛門に申し下し置かれたし」とこの日も言上している。

以上からわかるように、南町奉行所が相撲会所からの善左衛門登用の要望に応じなかった背景には、奉行所が寛政元年の勸進相撲に基づいて「上覧相撲」を実施しようとしていたことがある。

(2) 対立の背景となった寛政元年の勸進相撲

「上覧相撲」の雛形となった寛政元年の勸進相撲は、横綱が披露された初の興行だった。そして興味深いことに、この時も相撲会所は相撲式を善左衛門に執り行わせたいと要望していたのである。

寛政元年の勸進相撲興行は、11月11日から江戸深川において始まった。その開期中の同月13日に、19代目吉田善左衛門邸において会所年寄らの立ち会ひのもと、二大強豪力士の谷風梶之助と小野川喜三郎が、相撲史上初の横綱に叙任された。いわゆる横綱伝授である。それまで善左衛門は、相撲の家として仰がれていた公家の五条家の目代と唱えていたが、この伝授に際し五条家への事前通知は無かった(和歌森¹⁹⁾ p. 31)。吉田家が専決したこの横綱伝授は、会所の吉田体制がこの時すでに整っていたことを意味している(和歌森¹⁹⁾ p. 86)。そして、伝授の席上で善左衛門は、開催中の興行の場に自ら赴き、再度、観衆の前で横綱伝授をして両力士を披露すること、および、相撲式を行って格式を添えることを相撲会所に提案した(酒井¹⁴⁾ p. 165)。この提案は両横綱を披露するのみならず、横綱伝授や相撲式を実施する

善左衛門自身の権威発揚も意図したものと思われる。

相撲会所は、早速この前例をみない横綱披露および相撲式実施に対する許可を寺社奉行に求めた。しかし、これに対し寺社奉行は「先例、出候儀もしかと致さず」として、善左衛門が勸進相撲興行の場に赴いた先例はないことから「興行の場へ差し出され候儀は御見合わせ候」ようにという不許可の返答を行った(高埜¹⁷⁾ p. 253)。

幕府の不許可を知った会所の対応は早かった。まず、善左衛門の臨席を「決して相成まじく候様、御内意之有り候に付、善左衛門殿見物の儀相止め申し候」として取り止め、26日に「横綱伝授の儀は、木村庄之助罷越し、善左衛門の宅において右伝授免状とも申し受け候。之に依て右様披露等仕りたく」という代替案を申請した(酒井¹⁴⁾ p. 166)。つまり、横綱伝授の作法について善左衛門から教授を受けた会所行司の7代目木村庄之助による横綱披露、相撲式の実施を願い上げたのである。この時、相撲会所が善左衛門の登用願いを即座に取り下げた背景には、横綱披露に伴う興行収益の増収への期待があったと思われる。横綱披露を渡世の助けにしたいという会所の思惑は、同文書における「披露の儀、場所にて相触れ候はば、私共渡世の助力にも罷り成り申すべくと恐れながら存じ奉り候に付き、何卒、御憐憫、御慈悲を以て、今日場所にて相触れ申す様、御聞き済み下し置かれ」たしという懇願に如実に示されているからである。すなわちこの時、相撲会所が横綱叙任の気運にのった速やかな横綱披露を重視したため、善左衛門による相撲式実施は断念されたのである。

幕府は会所が申請したこの代替案を聞き届けた。これにより、29日に庄之助による横綱伝授と相撲式が通常取組に加えて行われ、両横綱が披露された。翌日以降は、毎日横綱の土俵入りが行われて興行は進行した。そして、翌寛政2年からは再び通常の興行形態に戻っている。

以上が、南町奉行所が「上覧相撲」の雛形に指定した寛政元年の勸進相撲である。通常の興行ではなく、相撲式が行われた元年のものを指定した

ということは、奉行所が相撲式を「上覧相撲」には不可欠のものとして捉えていたことを示している。また、相撲式をめぐる相撲会所と幕府の対立は元年にも既に存在していたが、この時幕府は善左衛門出座の先例がないことを根拠に、会所の要望を退けていたことがわかった。こうした先例主義は幕府の行政にみられる特徴の一つで、特に寛政の改革下にあった当時は、老中松平定信の命によって先例主義が顕著となっていたのである^{註1)}。

(3) 吉田善左衛門登用をはかる相撲会所側の主張点

相撲会所文書によれば、会所は「上覧相撲」準備の際に「相撲ノ儀ハ、古来禁庭節会ノ祭事、相勤め来候」善左衛門が「司之儀に候故、私共為にも、何卒、吉田善左衛門を召し出され」るようとして、善左衛門登用を要請している（式守¹⁵⁾ p. 171）。つまり、朝廷における相撲節会の祭事を勤めてきた善左衛門が、相撲関係者を束ねる相撲司の立場にあることを主張して「上覧相撲」相撲式への登用を願い出ているのである。しかし、会所の言い分は幕府にとって既知の内容だった。というのも、寛政元年の横綱披露問題の発生に際し、吉田家の由緒書（神沢⁴⁾ pp. 172-173）を善左衛門に提出させていたからである。元年に提出したこの由緒書において、善左衛門は自家が相撲の始祖・野見宿祢の流れを汲み、今日まで代々「相撲之故実等、伝授仕」っていること、朝廷から「相撲之司、行司之家」と認める勅命を受け、「追風」という行司名を賜ったこと、そして、先例主義をとる幕府を意識してか、代々相撲節会の御式を相勤めてきた「旧例」を持つことを主張している。また、「諸国の行司、ならびに力士共への免許、拙者家より差し出し来り候」として、自家が全国の行司、力士の上に立つ立場であるとも唱えていた。

この由緒書の内容は、現在では虚説という見方が一般的だが^{註2)}、既に江戸時代においても疑問視されていた。たとえば、文政12（1839）年に喜多村信節が著した『嬉遊笑覧』においては、「吉田家家説相撲故実」は「正史に所見なし」（喜多

村⁶⁾ pp. 116-117）という記述や、善左衛門は「野見宿祢の末孫とて、今、肥後国に現存してすまふ行司をなすといへれど、古への書付その事は見えず、虚談多く流布せりと見ゆ」（喜多村⁶⁾ p. 170）という記述がみられる。幕府が善左衛門の履歴を偽りと明言した史料は管見の限り確認できないが、幕府も当初から強い疑念を持っていたと考えられる。なぜなら、横綱披露問題の折りに、幕府は由緒書について何の言及も行わないままに善左衛門の出座を不許可とし（酒井¹⁴⁾ pp. 165-116）、さらに、「上覧相撲」の折りにも同様に善左衛門を斥けるなど、由緒書については黙殺の態度を示していたからである。

善左衛門がそうした相撲司を標榜するようになったのは、寛延2年（1749年）からのことである。この年に、勧進相撲行司の5代目木村庄之助と相撲取の初代伊勢ノ海が「式守伊之助」を名乗って、16代目吉田善左衛門の門弟となった。その際に両名に遣わした免許（細川³⁾ p. 1192）で、善左衛門は自らを「本朝相撲司」と称している。その免許によると善左衛門は、①「相撲之起源」と「土相撲」について、②貴人の前や殿中で相撲を行う際の「殿中貴人御前作法」について、③四股を踏む「地踏」について、④正月相撲の作法について、⑤神相撲について等を両名に伝授した。この門弟入りの後、5代目庄之助は、常時江戸の勧進相撲番付で筆頭行司として掲げられるようになり、また、初代伊勢ノ海も10年もの間、毎場所勧進元もしくは差添を務めて相撲会所を担う一大勢力となった（中¹²⁾）。善左衛門への入門が、相撲会所内ではかなりの権威をもって受け止められていたことがわかる。そして以後、代々の木村庄之助と式守伊之助は、常に吉田善左衛門に門弟入りするようになった。例にもれず、横綱伝授や「上覧相撲」に携わった7代目庄之助も天明7（1787）年に19代目善左衛門の門弟となっていたのである（9代目木村庄之助⁵⁾）。したがって、相撲会所が善左衛門を推挙した背景には、無論、こうした師弟関係も作用していたと考えられるが、他方では相撲会所の組織化もあった。

新田によれば、歴代の庄之助と伊之助は、善左

衛門門弟の称号をもって、他の行司や相撲取らにも相撲故実伝授の免許を与えており、それによって相撲会所の組織化が進んだとしている(新田¹¹⁾ p. 249)。このことから、相撲会所の組織化は寛延2年の庄之助、伊之助兩名の門弟入りに始まること、組織化の求心力は善左衛門が伝授した相撲故実にあったことを指摘した(新田¹¹⁾ p. 255)。つまり、新田の指摘は、相撲故実を保有する相撲司の登場が相撲会所の組織化と表裏一体の関係にあることを示したものである。したがって、「相撲司」善左衛門の由緒に対する幕府の黙殺は、相撲会所に危機意識を抱かせるものだったと思われる。なぜなら、善左衛門の由緒の否定は、同時に、相撲司の相撲故実の下に組織化されていた会所の求心力を揺るがすことにもなりかねなかったからである。寛政元年の横綱披露問題の際には、興行収益の観点から登用を断念した相撲会所だったが、最高の榮譽の場である「上覧相撲」への善左衛門不参加は、すなわち、善左衛門に対する幕府の不承認を意味する。このため、相撲会所は、自らのためにも何としても善左衛門の登用をはかりたかったのである。そのことは、「上覧相撲」への善左衛門登用を望む相撲会所が、南町奉行所に「私共為にも、何卒、吉田善左衛門を召し出され」と言上していることにも示されているだろう。相撲会所の団結には、善左衛門がその核をなす相撲故実家として重要だったのである。

だが、寛政元年から引き続く善左衛門の不採用は、幕府が善左衛門を頂点とする相撲会所の体制を認める意向にないことを意味するものであった。会所もそうした幕府の意向を上覧準備当初から感じ取っていたと思われる。そのことは「上覧相撲」開催内意を受け、実施要領の報告を命じられた21日から督促を幕府に受ける25日まで「相撲式」についての報告だけを控えた相撲会所の行為から窺える。このように幕府が善左衛門の登用を許さない傍ら、元年の横綱披露問題の際に、会所は代替案において木村庄之助を推挙し、幕府もそれを許可した。また、「上覧相撲」の時も同様に、庄之助が幕府からの指名を受けた。これは換言すれば、庄之助が会所ならびに幕府から相撲式

を行うに相応しい相撲故実家と認められてきた背景が、寛政元年以前に既に存在したことを示している。

(4) 木村庄之助の登用が容認された背景

横綱披露問題の際、勧進相撲へ出座した先例のないことを根拠に善左衛門の登用願いは却下された。一方、先にみたように、庄之助は寛延2年に善左衛門へ門弟入りした後、勧進相撲の筆頭行司として活躍するようになった。つまり、庄之助は、勧進相撲行司として勧進相撲に出座した多くの先例を備えていた。このことは、先例を重視する幕府が庄之助をのぞんだ背景の一つに挙げられるだろう。だが、さらに、庄之助をのぞむ背景として、次の二つの事件があった。それは、宝暦8(1758)年に起こった「八王子出入一件」と明和9(1772)年に発生した「越後国相撲出入之一件」である。両事件ではともに、木村庄之助の主張する相撲故実が争点になっており、庄之助は相撲故実家であるという印象を幕府に与えることになった。

南部藩の行司鶴ヶ峰¹⁹⁾が著した相撲に関する係争事例集である『秘書』(1808)によれば、「八王子出入一件」の発端は、宝暦8年、武州八王子村において相撲会所年寄の玉垣額之助が勧進相撲興行を行った際に「穢多」の人々の見物を拒絶したことにある。これに怒った「穢多」の人々が八王子村内外から多勢押し寄せ、興行は3日間で中止に追い込まれた。江戸に戻った玉垣が、総年寄木村瀬平と共に「角力渡世の者が迷惑仕る」、「大勢之年寄、門弟共難儀」していると町奉行所に訴え出たことにより、相撲会所と「穢多」の両関係者は吟味を受けた。この吟味の最中、5代目木村庄之助が奉行所に罷り越し、上代以来の相撲の故実、ならびに行司相撲家の故実を言上するに及んだのである。奉行所は庄之助が主張した故実を認め、「穢多」の相撲見物を今後禁じる決裁を下した。すなわち、幕府が庄之助を相撲故実家として認めた一つの事件である。

また、「越後国相撲出入之一件」の経緯は、前述の『秘書』によれば、明和9年越後国新城村

において、村方が素人勧進相撲を行っていたところ、相撲取の角文字林平と四海波勘五郎が相撲故実に拠らない素人勧進相撲を咎めだてて村の者と乱闘となった。相撲会所年寄達もこれに憤り、町奉行牧野成賢に訴え出た。双方の関係者が吟味を受け一方、牧野成賢は、初代伊勢ノ海、つまり初代式守伊之助と六代目木村庄之助とを召し出して「相撲根元」を問いただした。これに応じて両人は「相撲作法、故実」を言上し、木戸銭をとる勧進相撲は相撲故実を有する者の特権と主張した。結果、牧野成賢は伊勢ノ海、木村庄之助の主張を全面的に認めた。翌安永2(1773)年にその特権を認める証文を兩人に与えて決着としたのである。同時に、相撲仲間にこの証文の趣意を徹底させること、今後は「争論仕まじき」よう相撲会所の者を統轄することも庄之助に命じている。この一件からは、当時、幕府が庄之助のことを相撲故実家としてだけでなく、相撲会所の責任者として認識するようになっていたことも窺える。

上記の二つの事件からわかるように、庄之助には勧進相撲行司として興行に多く出座していた先例があっただけではない。相撲会所を代表する相撲故実家、相撲会所の統轄者として幕府に認められてきた実績も備わっていたのである。

2. 吉田善左衛門登用にいたる時期：5月27日から6月10日まで

(1) 「上覧相撲」の延引決定

正式に「上覧相撲」開催を相撲会所に通達した翌27日、南町奉行所は準備に日数を要する土俵設営に早速取り掛かった。見分のため、相撲会所方からは鍛山、伊勢ノ海、木村庄之助らが出席し、幕府方からは、奉行池田長恵、上覧御目付の平賀、中川に加えて、若年寄井伊直朗が幕閣重臣を代表する上覧相撲掛として同席した(酒井¹⁴⁾ p. 172)。設営は、鍛山が24日に提出した図面に従って行われる予定だった。ところが、この席上で井伊直朗が土俵の四隅に立てる四本柱について、勧進相撲の「定式より高く取り立て申すべき」と異議を唱えたのである(「取扱一件」⁹⁾、5月27

日)。井伊が勧進相撲とは異なる「上覧相撲」ならではの格式を望んだためだった。その日の設営は中止され、鍛山らは今後の対応を協議するため、明日までの猶予を願い出て帰参した。

29日に土俵設営は再開されたが、これは井伊の意向を受け入れたものではなかった。南町奉行所内では、平賀、中川が池田長恵に伺いを立て、既に8両2分の巨費を投じて作らせていた四本柱をそのまま用いたい旨を伝えたが、相撲会所に明確な指針を示せずにはいた。一方、相撲会所も28日中に結論を出せないでいた。しかし、設営の為に手配した人足、役人を27日から待機させたままだったため、設営を急ぐ奉行所の意向で再開されたのである。同日、井伊直朗には理解を求める書状が南町奉行所から出された(「取扱一件」⁹⁾、5月28日)。その内容は「上覧相撲」ならではの格式を添えるものとして、相撲式があることを説明すると共に、相撲式の次第を記し、現状のまま準備を進めても「上覧相撲」の格式をそぐものではないことを述べるものだった。

6月1日に土俵および四本柱の設営は完了した。設営の傍ら、相撲会所は「何卒、右追風を召し出され、上覧の式、この者へ御尋ね下され」とか、善左衛門に「規式取り行うように仰せつけさせられるよう」と、上覧相撲式への善左衛門登用を繰り返して要望していた。しかしながら、依然として南町奉行所は、登用は「難しきように思し召され」という拒否の姿勢を貫いていた(式守¹⁵⁾ p. 171)。同日、南町奉行所は、「上覧相撲」の折りに庄之助には將軍お目通りの予定があるため長袴を着用するように命じており、庄之助による「上覧相撲」の準備を着実に進めていたことがわかる(「取扱一件」⁹⁾、6月1日)。3日には、最終確認として庄之助が務める相撲式次第が書き上げられたほか、一切の準備が整い、後は5日の「上覧相撲」を待つばかりとなった(「取扱一件」⁹⁾、6月3日)。

しかし、翌日の4日に、突如として南町奉行所は「明五日は相撲御延引仰せ出さる」通知を相撲会所の若藤恒右衛門に申し渡した(酒井¹⁴⁾ p. 172)。新たな開催日は「近日の内、仰せ出され

るべく候」とあるだけで未定だった。この時、相撲会所は4月22日から興行中だった勸進相撲を「上覧相撲」のために休止していたが、それを再開しても良いという内意も与えられたことから、幕府は暫く開催を見合わせる予定だったと思われる。これに驚いた相撲会所は、同日夕方に鍛山、伊勢ノ海を平賀、中川へと遣わして「御日限為し仰せ付けられ候までは、相撲興行の儀、延引仕り候」と言上した。新たな開催日が決定するまでは、興行を休止したままにする覚悟を伝え、早期の開催を迫ったのである。

延期の原因は四本柱の高さだった。すなわち、四本柱は、かねてからの奉行所の黙認のもと、勸進相撲興行の時と同じく土俵面上1丈2尺5寸(約4メートル)に設定されていた。これに井伊直朗が納得しなかったのである(「取扱一件」⁹⁾, 6月4日)。

(2) 19代目吉田善左衛門の登用決定へ

5日に南町奉行所は鍛山と伊勢ノ海とを召し出し、「上覧相撲」を再度11日に開催すること、四本柱を建て直したいこと、相撲式を庄之助で行うことに変わりはないことと下命した(「取扱一件」⁹⁾, 6月5日)。この時、「上覧相撲」に相応しい格式を望む南町奉行所に対して、伊勢ノ海は改めて善左衛門による相撲式の実施を打診した。伊勢ノ海はその根拠として、善左衛門が本朝相撲司だという従来の理由に加え、庄之助が町人身分の「身分稀之儀」であることを言上した。これに対し、南町奉行所は改めて善左衛門による相撲式実施はあり得ないと返答する傍ら、「上覧相撲」を寛政元年の作法ではなく、貴人の前や殿中で相撲を行う際の「御前之法式を以て相勤候やう」と庄之助に命じた(「取扱一件」⁹⁾, 6月5日)。このことから、庄之助による勸進相撲の法式に則った上覧が不可能になった後も、南町奉行所は庄之助による「上覧相撲」という方針を維持したことがわかる。この「御前之法式」は、寛延2年に善左衛門が庄之助、伊之助両名に遣わした免許(前出)にも確認でき、歴代の庄之助にも伝授されていたと思われるが、実際に運用されたことは

なかった。しかし、南町奉行所は庄之助が善左衛門より伝授された上相撲、正月相撲、神相撲などの作法のうち、將軍臨席に相応しい「御前之法式」に基づいて上覧を実施しようと計画したのだろう。

しかし、幕府は翌日から密かに善左衛門についての吟味を始めた。そこで明らかにされたのは次の事柄である。まず、伊勢ノ海、木村庄之助の兩人は「追風門弟」であり、兩人が「行司弟子取」「相撲之弟子取」を行っているのも善左衛門の許しを得てのことだということ。これは、元年に提出された善左衛門の由緒書(前出)において主張されていた事項である。これを確認したということは、相撲会所の最高統轄者を庄之助としてきた従来の見解を南町奉行所が翻したことを意味している。続いて明らかとされたのは、庄之助以下の行司は常時帯刀しているけれども、町方支配を受ける町人身分だということである。これは、庄之助は町人身分であるとした伊勢ノ海の言い分を裏付けるものだった。これらに加え、谷風、小野川に横綱を伝授したのは、本来、善左衛門であったことも吟味で明らかとされた。この吟味は、善左衛門が相撲故実家であることを示す先例を求めて行ったと思われる。ただし、その伝授の折に授与した「力士目録失せ申すに付」き、はっきりとした確証は現在得られていないことも併せて報告された(「取扱一件」⁹⁾, 6月6日)。善左衛門の実績を立証する力士目録が消失しているにもかかわらず、8日に伊勢ノ海が召し出され、以上の点について確認を受けただけで吟味は終了した(「取扱一件」⁹⁾, 6月8日)。再度の「上覧相撲」延引という事態を避けるために、切迫した状況下で慌ただしく吟味が行われたことが窺える。

奉行所がこうした突然の態度転換を行った理由は「取扱一件」には表記されていない。しかし、吟味において庄之助の身分を照合したことで窺えるように、ひとつには庄之助が町人身分だと訴えた前日の伊勢ノ海の言上があったと思われる。5日に予定されていた「上覧相撲」が格式不足として延引になった以上、再度の「上覧相撲」には相応の格式が求められる。それには、町人の庄之

助よりも士分の善左衛門による上覧の方が格式としては勝るからである。加えて、この時点では庄之助を推す奉行所の根拠も薄らぎつつあったことが指摘できる。つまり、勧進相撲法式の「上覧相撲」を予定していた奉行所が庄之助を望んだ背景には、庄之助が勧進相撲行司として実績を積み重ねていたことがあった。だが、新たに「上覧相撲」の雛形として「御前之法式」が想定されたとき、「御前之法式」に基づく相撲を行ったことのない庄之助は、実績をもたないという点で善左衛門と同列になったのである。むしろ、勧進相撲の格式が「上覧相撲」には不適とみなされて延引された以上、勧進相撲行司という庄之助の経歴が再度の「上覧相撲」にはそぐわなくなっていたとも考えられる。庄之助の身分照合が行われる一方、善左衛門が庄之助の師匠であること、相撲故実家であることなど、善左衛門に有利な事柄が吟味で挙げられたこの時点で、事態は善左衛門登用へと傾きつつあったということができる。

そして再び開催前日という押し迫った10日に「相撲上覧当日、吉田善左衛門に行司相勤め申すべき旨」を老中戸田氏教が決定した。善左衛門の土俵式法に従って今日中に土俵を築き直す命も併せて下った（酒井¹⁴⁾ p. 172）。この報は10日暮れの六ツ時（午後6時）に初めて相撲会所にもたらされた（式守¹⁵⁾ p. 171）。だが、相撲式の実施者については依然として明記されていなかった。

「上覧相撲」において行司を務めるという形で登用が決定した善左衛門は、「屋根、四本柱、土俵」の建て直しを要求する幕府に対して、「急なりに付、御式の通り出来かね申す」と拒否の姿勢をみせた。そして幕府の要求を容れる交換条件として、四本柱に巻き付ける絹水引、注連縄を総て吉田家のものと取り替えること、「上覧相撲」最後に行われる横綱同士の取り組みの行司だけを自らが務めること、および相撲式を自らが務めることを提示した。時間の猶予のない幕府に選択の余地はもはやなく、善左衛門の要求のすべてを承諾し、善左衛門はこの日夜中までかかって相撲会所を指示し、「土俵式之通」りに土俵を築き直した（「取扱一件」¹⁶⁾、6月10日）。こうしてようやく

「上覧相撲」は開催の運びとなったのである。

「上覧相撲」当日の様子の一部始終を記録した幕府役人、成島峰雄著の『すまゐ御覧の記』（酒井¹⁴⁾ pp. 175-176）によると、将軍以下の陪臣、力士、行司ら大勢の衆目の中、最初に「野見の宿祢が裔にして、いにしへの志賀清林といへる高名の相撲の流れをつぎ…内裏より追風といふ名を給はり、世のすまひの有職たる」善左衛門が、「五穀成就のまつりのわざ」なる相撲式を行い、途絶えて久しい「すまひのせちゑ」を再現したとある。相撲節会行司の家系を主張しながらも、寛政元年以来取り上げられてこなかった吉田家の由緒が承認されているのがわかる。そして、相撲節会行司・吉田善左衛門が登用されたことによって、「上覧相撲」は勧進相撲の延長でなく、相撲節会の復活として演じられたのである。その時の善左衛門は「面目限りなきものならし」という得意絶頂の様相を呈していた。

結 論

第一の時期すなわち5月20日から26日までの対立発生期からは、相撲会所が「上覧相撲」準備開始後まもない26日に、善左衛門の登用を南町奉行所に要望していたことがわかった。この時点での南町奉行所の構想は、寛政元年の勧進相撲の法式で「上覧相撲」を実施しようというものだった。したがって、相撲会所は「上覧相撲」の規式を既に会得していたはずである。これは、相撲会所が善左衛門の登用を幕府に要望したのは「上覧相撲」を行い得るだけの規式を有していなかったからだと推察した高埜の言及とは異なるものである。むしろ、相撲会所が南町奉行所に善左衛門の登用を要望し続けたのは、登用によって権威を獲得し、組織の求心力を高めたいという相撲会所側の事情が背景にあったためだった。

善左衛門登用にいたる第二の時期からは、南町奉行所が善左衛門登用を視野に入れ始めたのが、善左衛門についての吟味を開始した6月6日からだったことがわかった。だが、登用の通達が上覧前日という差し迫った状況になるまで行われず、加えて、老中決裁によったことを考えると、

出自の疑念が濃く、相撲故実家としての確証の乏しい善左衛門を登用することが、いかに容易ならざるものだったかがわかる。なおこれは、善左衛門の登用決定の理由を相撲式の実施に求めた新田の推察とは少し異なるものとなった。というのも、登用決定を通達する老中の命が下った時点において、相撲式の実施者については依然として明示されていなかったからである。幕府は最後まで善左衛門が相撲式を実施することに対して態度を保留していたのである。相撲式実施については、老中からの下命を受けた善左衛門が「上覧相撲」の格式に沿った土俵を設営すること、ならびに上覧へ出座する交換条件として幕府に認めさせたものだった。すなわち、もはや自分が「上覧相撲」には不可欠な人物であること、加えて、開催まで時間がないという幕府側の切迫した状況を見通した善左衛門が、交渉に踏み切って獲得した成果であった。

以上、「上覧相撲」の開催経緯は、限られた準備期間の中で、江戸時代初にふさわしい格式を有する「上覧相撲」を実施する必要に迫られた南町奉行所の苦心の過程と捉えることができる。その最終的な解決策として決定されたのが19代目吉田善左衛門の登用だった。そして当日の「上覧相撲」は実質的には相撲会所によって担われた勧進相撲でありながら、かつての相撲節会の復活として実施された。だが、留意しておかなくてはならないのは、南町奉行所が一度として相撲節会の法式に則った「上覧相撲」を行うようには指示していない点である。これは、「上覧相撲」について、幕府が安定した当時の政権を背景に、最高権力者が朝廷から幕府に移行したことを誇示するために相撲節会を復活させたものと述べた宮本の見解とは異なるものである。というのも、「上覧相撲」が相撲節会の復活となったのは、善左衛門の登用に伴い、相撲節会以来の相撲司を標榜する彼の由緒が承認される形となったためである。むしろ、企画当初の南町奉行所が、勧進相撲法式の「上覧相撲」を予定していたことを考えると、「上覧相撲」にそうした政治性を認めることは難しい。

また、善左衛門の由緒は、寛政元年以来幕府に

黙殺されていたものだった。よって善左衛門の由緒が認められた「上覧相撲」は、相撲会所が吉田体制を披露し、吉田体制に対する幕府の公認をとりつけたことを表明する場となった。会所のかねてからの念願が実現したのである。相撲会所が得た公認は、いわば「上覧相撲」開催に伴う副産物にすぎなかった。だがそれは、絶対的な権威を得ようとした相撲会所の努力の結実だったといえる。つまり、この「上覧相撲」の開催経緯は、相撲会所という勧進相撲興行団体が幕府の意向に巧みに便乗して権威を獲得し、体制化を達成するに至った一つの経緯でもあったのである。

謝辞：なお、『秘書』閲覧にあたりましては、ご高配を賜りました南部利昭氏に深く感謝いたします。

注

注1) 江戸時代が先例主義だったことは広く知られているが、それが行政細部にまで浸透していたことを端的に示す例がある(進士¹⁶⁾)。それは、当時の役所の業務日誌である「御番所勤方置帳」の冊数の増加である。これは、枯枝ができた、壁の白土が落ちた、というような些事の処理に至るまで、先例と照合して逐一報告する義務を幕府役人が負っていたことに触れたものである。すなわち、享保年間(1716~1735年)以前の「御番所勤方置帳」は、1年あたり美濃紙30枚ほどで事足りていたのが、宝暦年間(1751~1763年)になると、業務内容にさしたる変化は無いにもかかわらず、先例との照合結果報告書が増加したために、2寸ばかりの厚さの帳面となり、寛政の頃には3寸の厚さをもつ2冊の帳面になったというものである。帳面は、文政年間(1818-1829年)に至ると3冊になったというから、幕府の先例主義が、時代を経るに従って一層顕著になっていったことがわかる。特に、「上覧相撲」が企画された当時は、老中松平定信が「諸制を享保の制に復する事」(国史大系編集会編⁹⁾)という命を出し、享保年間の制度に倣った寛政の改革を進めるなど、享保年間に倣った先例主義が顕著であった。

注2) 例えば、由緒書において善左衛門が主張している事柄のうち、高埜は少なくとも以下の事柄が虚偽だとしている(高埜¹⁷⁾ p. 254-255)。①吉田家が野見宿祢の流れを汲む行司志賀清林の子孫にあたること、②文治年間に後鳥羽上皇からの招聘に応

じて吉田家の祖先が出仕し、その際に朝廷から相撲司と認める勅令を得たこと、③その後、承久の乱が起こったために相撲節会が途絶したこと、④永録年間に相撲節会は復活したものの、吉田家15代目当主の時に、自然に途絶してしまったこと、⑤元龜年間に二条関白公より、相撲司の証として行司装束を拝領したということ、である。新田も「家伝の大部分は事実としてはうけいれがたい」(新田¹¹⁾ p. 248)としている。

文 献

- 1) 常陸山右衛門 (1914) 相撲大観. 民友社: 京都, p. 150.
- 2) 古河三樹 (1968) 江戸大相撲. 雄山閣: 東京, p. 155.
- 3) 細川潤次郎編 (1900) 古事類苑 相撲上. 吉川弘文館: 東京.
- 4) 神沢杜口 (1791) 翁草. 日本随筆大成編集部編 (1978) 日本随筆大成24巻. 吉川弘文館: 東京.
- 5) 9代目木村庄之助 (1827) 相撲行司家伝. 近藤瓶城編 (1984) 改定 史籍集覧 第16冊 (復刻版). 臨川書店: 京都, p. 514.
- 6) 喜多村信節 (1839) 嬉遊笑覧. 日本随筆大成編集部編 (1979) 日本随筆大成 別巻8. 吉川弘文館: 東京.
- 7) 窪寺紘一 (1992) 日本相撲大観. 新人物往来社: 東京, p. 60.
- 8) 国史大系編集会編 (1976) 続徳川実紀 第1編. 吉川弘文館: 東京, 天明7年7月朔日条
- 9) 国立国会図書館参考書誌部編 於吹上御庭相撲上覧二付取扱一件. 南撰要類集. 国立国会図書館蔵請求番号818-4.
- 10) 宮本徳蔵 (1994) 力士漂白. 筑摩書房: 東京, p. 127.
- 11) 新田一郎 (1994) 相撲の歴史. 山川出版社: 東京.
- 12) 中 英夫 (1976) 武州の力士. 埼玉出版社: 埼玉, p. 170.
- 13) 能見正比古 (1975) 横綱物語. 講談社: 東京, p. 17.
- 14) 酒井忠正 (1956) 日本相撲史 上. ベースボールマガジン社: 東京.
- 15) 式守蝸牛 (1793) 相撲隠雲解. 楠瀬恂編 (1927) 随筆選集 第9巻. 資文堂: 東京.
- 16) 進士慶幹 (1966) 江戸時代の武家の生活. 至文堂: 東京, pp. 70-72.
- 17) 高埜利彦 (1987) 幕藩体制における家職と権威. 朝尾直弘ほか編 日本社会史 第3巻. 岩波書店: 東京, pp. 233-276.
- 18) 鶴ヶ峰 (1808) 秘書. 南部利昭氏所蔵.
- 19) 和歌森太郎 (1982) 相撲の歴史と民俗. 弘文堂: 東京.
- 20) 横山健堂 (1943) 日本相撲史. 富山房: 京都, p. 56.

(平成10年1月29日受付)
(平成10年9月5日受理)